

第486回 2月24日開催
出席委員（50音順・敬称略）

荒巻 裕	大村 英昭
木下 明美	倉光 弘己
黒田 勇	深井 麗雄
森 輝彦	

ラジオ番組

「サンデースペシャル」

『米朝・三枝・浜村 淳 夢のてい談』

2月1日（日）午後8時30分～9時放送

「マンデースペシャル」

『米朝・三枝 夢の共演』

2月2日（月）午後8時～9時放送

[この二つの番組を基にして、ラジオ番組のあり方などを審議]

* 荒巻委員

「サンデースペシャル」の中での桂三枝の次のような言葉が印象に残った。「ラジオはイメージをどんどんふくらませてくれる貴重な存在だ」。また「せめてラジオだけでも、ベテランのパーソナリティーの深い味わいのある話が聞きたい」。ラジオの可能性を語る上での的を射た発言で、私のような中高年は、人生の機微に触れるような番組こそがもっとほしい。

* 倉光委員

私は徳川夢声の「武蔵」の朗読をラジオの前に座りながら聞いて育ったが、あの独特の「間」の世界に引きずり込まれていた。ただ、今の「ながら」で聞く時代に果たしてあの雰囲気聞けるかどうかかわからないが、研究課題だとは思う。落語も、時間にこだわらないで最後の落ちまで省略なしで聞かせてもらえると、落語好きにはたまらないしラジオでの落語の可能性も広がると思う。

* 黒田委員

私は徳川夢声ではなく、60年代後半のラジオの深夜放送で育った世代である。当時の深夜放送には主張があり個性があり、そして「今」が語られていた。だから、ある局の「深夜便」のようなノスタルジーが中心の番組は、正直言ってつらい。「今」の何かにつながるもの、主張があるもの、それらとノスタルジーが絡み合っている番組なら、きっと聞くとと思う。

* 木下委員

私たちの世代の女性は、ノスタルジーで「昔は良かった」などとは決して言わない。今の自分を最も大切にする世代である。何か問題を抱えていても、自分としてどう解決するのが出発点なのである。ところが、その今の自分を雑誌で確認したいと思っても、ポスト「クロワッサン」的な私たちの世代がほしいものが見つからない。ラジオがそういった雑誌の役割を果たしてくれたら、どれだけ楽しいかと思う。

* 深井委員

私は「今」にそれほどこだわらないが、徳川夢声の「武蔵」がどれだけすごかったかは是非聞いてみたい。アーカイブと言うか、夢声らそれぞれの時代の超一流の語りを聞かせてくれるような究極のラジオ番組を作れないものか。その番組の中で、「今」を語ることができればそれに越したことはないが、とにかくノスタルジーにどっぷりと浸りたいのである。

* 大村副委員長

私も、基本的にラジオの番組はノスタルジーに訴えることだと思う。その意味では、木下委員が言われた通り、制作者側も中高年の女性リスナーはあきらめざるを得ないと思う。逆に開き直って、中高年の男性をターゲットに徹底的にノスタルジーにこだわって、昭和30年代から40年代の「カバー番組」といったものを作ってみたらどうか。

* 森委員長

ラジオ番組の最も重要なコンセプトは、リスナーに喜びと元気を与えることだと思う。そのためには、どんな番組でも「本物」を「本気」で扱ってほしい。また、例えノスタルジーであっても、その心の原風景をラジオ番組が取り込むことによって、リスナーが何かを「今」に生かそうという喜びを感じることができると思うし、元気も出てくるのではないか。